

外国語教育メディア学会 (LET)

第 93 回 (2019 年度春季)

中部支部研究大会



プログラム

日時 2019 年 5 月 25 日 (土) 9:30-17:00
会場 名古屋学院大学名古屋キャンパスたいほう恵館
〒456-0062 愛知県名古屋市熱田区大宝二丁目 4 番 45 号

研究大会実行委員長 工藤 泰三 (名古屋学院大学)
副実行委員長 梁 志鋭 (名古屋学院大学)

主催 外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部
後援 愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会



問い合わせ先
外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部事務局
支部サイト (<https://www.letchubu.net>) の
「お問い合わせと原稿送信」からお問い合わせください
Twitter: @LETChubu
研究大会サイト:
<http://bit.ly/LETC2019Spring>



日 程

9:30 受付 【1階ホール】

9:30 展示 【1階ホール】

10:00－10:10 開会式 【1階 メアリーホール】

司会：工藤 泰三（名古屋学院大学）

主催者挨拶：高橋 美由紀（中部支部支部長）

開催校挨拶：柳 善和（名古屋学院大学外国語学部長）

10:15－11:40 講演 【1階 メアリーホール】

司会・講師紹介：工藤 泰三（名古屋学院大学）

講師：石森広美（宮城県仙台二華高等学校）

「SDGs時代のグローバル教育～グローバルシティズンシップを育む～」

グローバル社会で必要なのは、単なる知識ではなく、その活用能力であり、言語や文化、風習や価値観等が異なる多様な人々と創造的かつ建設的に意見を交換し合い、理解し合い、協調し、共に課題解決のために手を取り合うことのできる開かれた態度である。SDGsは時代を反映したタイムリーな地球的課題（global issues）であり、未来に生きるすべての人のための目標である。“No one will be left behind”という考えの下、国家、行政、組織、職場（学校）、地域、家庭、個人等、様々なレベルで一人ひとりが「地球市民」として行動していくことを求めている。「地球市民」としての資質、すなわち「グローバルシティズンシップ」を育むには、世界で協働して解決を図るべきグローバルイシュー、すなわちここで言うSDGsが掲げる目標・課題についての「知識・理解」、問題解決を図るにはそれを可能とする「技能・スキル」（思考力、コミュニケーション力、情報収集／活用力等）、またそれを根底で支える「姿勢・態度・価値観」が不可欠である。そうした資質・能力を育む実践事例を取り上げつつ、英語教育の果たすべき役割について考えたい。

11:40－12:40 昼食

展示等ゆっくりご覧下さい。【1階ホール】

12:40－13:00 総会 【1階 メアリーホール】

13:10－14:50 研究発表・実践報告

(1)13:10－13:40 (2)13:45－14:15 (3)14:20－14:50

第1室（3階303教室）

司会：川口 勇作（愛知学院大学）

(1) Creating a Communicative Teaching Environment in an Online Synchronous Japanese Classroom

【実践報告】

John Andras Molnar（金城学院大学）

(2) 指導者用デジタル教科書の活用実態に関する検討

【研究発表】

渡辺 芳朗（愛知教育大学大学院）

- (3) How to Maximize Survey Response Rates on Google Forms: An Application of Dornyei's Principles
【実践報告】
Nicholas Boyes (名城大学)

第2室(3階304教室)

司会：福田 純也(中央大学)

- (1) 日本人英語学習者のエッセイにおける従位接続詞 because の誤用分析【研究発表】
寺井 雅人(名古屋大学大学院)
- (2) L1 と L2 単語認知における頻度効果の差異【研究発表】
石田 知美(名古屋大学)
- (3) CLIL を取り入れた日本(ローカル)と世界(グローバル)の両方の視点を育成する教育【実践報告】
高橋 美由紀(愛知教育大学)

15:00-17:00 シンポジウム 【1階 メアリーホール】

「SDGs×英語教育 ～SDGsの達成に向け、英語教育はどう貢献できるか～」

司会・コーディネーター：工藤 泰三(名古屋学院大学)

2015年に国連サミットで採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」は、そこに示された17のゴール(Sustainable Development Goals: DGs)の達成に向けて地球上のすべての人々が努力することを求めている。本シンポジウムでは、私たち英語教育に携わる人々がSDGsの達成に向けどのような貢献ができるのか、各校種での取り組みに触れながら議論したい。

シンポジスト

- 宇土 泰寛(小・相山女学園大学)
中垣 尚子(中・鳥羽市立神島中学校)
山本 孝次(高・愛知県立刈谷北高等学校)
工藤 泰三(大・名古屋学院大学)

コメンテーター

石森広美(宮城県仙台二華高等学校)

17:30-19:30 懇親会

司会：梁 志鋭(名古屋学院大学)

開催校挨拶：工藤 泰三(名古屋学院大学)

発表概要

第1室 (3階 303教室)

(1) Creating a Communicative Teaching Environment in an Online Synchronous Japanese Classroom

【実践報告】

John Andras Molnar (金城学院大学)

Teaching in an online, synchronous (live) classroom creates unique challenges such as maintaining student focus and encouraging student interaction when all members of the class are in different physical locations. In this session, the presenter will detail his own experience teaching both elementary Japanese I and II courses online to college students in the United States. With research showing that current students prefer problem solving and group work as opposed to lectures, and connecting course content to the real world, the presenter will show collaborative exercises to enhance the communicative aspect of the classroom while allowing the teacher to step back and take the roll of facilitator rather than instructor. Tools include blogs, live collaborative games, shared group work quizzes, and online language partners. The presenter found that strategies in the online classroom were easily adapted to the traditional classroom, improving communicative teaching there as well.

(2) 指導者用デジタル教科書の活用実態に関する検討

【研究発表】

渡辺 芳朗 (愛知教育大学大学院)

本研究の目的は、指導者用デジタル教科書に対して中学1年生と英語教師がどのような意識を持っているかを明らかにすることである。そのために、2019年3月に8つの公立中学校の中学1年生(N=1,503)と英語教師(N=31)を対象に「デジタル教科書に関する質問紙調査」を行った。調査内容は、指導者用デジタル教科書(New Horizon English Course 1)を用いた授業に対する効果の有無と教科書のUnit教材で扱われている11の言語活動に関する効果の度合いについてである。言語活動に関する項目については、生徒と教師が効果的であると答えた言語活動の順位を算出し、ケンドールの順位相関を求めたところ、有意に相関していた($r=.98, p<.01$)。項目間については、「本文の聞き取り」と「本文の音読」、「Listen 問題」の相関が強く、「単語練習」と「基本文導入」、「穴埋め問題」が弱かった。

(3) How to Maximize Survey Response Rates on Google Forms: An Application of Dornyei's Principles

【実践報告】

Nicholas Boyes (名城大学)

Especially while using online surveys, educational researchers want to increase response rates from students and/or teachers. However, response rates to online surveys are typically low. Respondents often do not answer the survey if they do not feel a connection, and online surveys can be impersonal. Thus, response rates remain low. This presentation will offer suggestions from Dornyei on how researchers can transform their surveys in order to maximize commitment among respondents. Dornyei offers some unconventional advice such as waiting to ask for personal information until the end of the survey. An initial request for personal information from respondents often seems cold and uncaring. This can substantially reduce response rates. Other areas that reduce response rate including survey design, question formatting, execution timing, etc. will also be discussed and applied specifically to the online survey platform Google Forms.

第2室 (3階 304教室)

(1) 日本人英語学習者のエッセイにおける従位接続詞 **because** の誤用分析 【研究発表】

寺井 雅人 (名古屋大学大学院)

従位接続詞 **because** は新情報を導入するため、一般的に主節の後ろに生起すると考えられる (Swain, 2005)。しかし、英語学習者はその規則を無視して **because** を使用するため、たとえ熟達度の高い学習者による文章でも、母語話者にとって不自然な文章になる場合がある。そこで本研究では、NICER_1.0 (杉浦, 2018) に含まれる日本人英語学習者 287名と英語母語話者 55名のエッセイにおいて **because** の使用頻度、位置に違いがあるか、そして情報構造という観点から誤用分析を行った。しかしながら、本研究では **because** の使用頻度、使用される位置に関して、英語学習者と英語母語話者には大きな差は見られず、また情報構造という点から分析しても、英語母語話者の文章には日本人英語学習者とほぼ同じ程度の誤りが確認された。このことから、情報構造における **because** の誤用は必ずしも英語学習者特有のものではない可能性が示唆された。

(2) L1 と L2 単語認知における頻度効果の差異 【研究発表】

石田 知美 (名古屋大学)

第二言語と母語の言語処理とでは、言語的特徴に対する影響が異なることが指摘されている。例えば、頻度効果は第二言語の方が大きいと報告されている。本研究は、頻度効果の相違は、言語間の競合によるものか、第二言語に対する言語接触量の違いに起因するものなのかを検証した。言語間の競合とは、第二言語を処理するとき、単語を認知するために、第二言語間だけでなく第二言語と母語の間で、言語競合が起きるため、頻度効果に差が大きくなるという説である。例えば、オランダ人英語学習者は英語で“**bale**”という語を認知するのに、似たようなつづりの英語“**bake**”と区別するだけでなく、母語であるオランダ語“**balk**”とも区別する必要がある。この説が正しければ、アルファベット以外の言語を母語に持つ日本人英語学習者には頻度効果の差は見られないことになる。本研究では、日本人英語学習者と英語母語話者を対象に語彙性判断課題を行った。その結果、日本人英語学習者は母語話者より有意に頻度効果が高いことが明らかになった。

(3) CLIL を取り入れた日本 (ローカル) と世界 (グローバル) の両方の視点を育成する教育 【実践報告】

高橋 美由紀 (愛知教育大学)

文部科学省は「グローバル人材」の養成を掲げ、次期学習指導要領において、「聞くこと」などの五領域で英語の目標を設定し、カリキュラム・マネジメントの視点から「他教科等で学習したことを活用する」等を求めている。本発表では、海外の日本人学校中等部のイマージョン授業として行なわれている事例研究から、次期学習指導要領に対応し、CLIL (Content and Language Integrated Learning) を活用した英語教育の在り方について提案する。具体的には、はじめに、イマージョン授業での家庭科と理科・数学の授業から、英語を通じた教科内容の指導について述べる。次にこれらの授業が生徒の英語コミュニケーション能力の育成に効果的であることを、CLIL の「4つのC」(1) Content (2) Communication (3) Cognition (4) Community の観点、及び、五領域の目標「必要な情報を聞き取る」「短い文章の概要を読み取る」等と照らし合わせて考察する。最後に、これらの授業が日本と世界の両方の視点を持つ生徒達にとってどのような効果があるかを、グローバル人材の育成の視点から考察する。

賛助会員展示

株式会社エル・インターフェース
チエル株式会社
株式会社桐原書店
株式会社アルク
株式会社教育測定研究所

<https://www.supereigo.com>
<https://www.chieru.co.jp/>
<https://www.kirihara.co.jp/>
<hyyps://www.alc.co.jp>
<https://www.jiem.co.jp/>

昼食

当日、食堂は営業しておりません。会場周辺ではコンビニ、及び、飲食店が数店舗営業しておりますが、会場の建物からは離れておりますので、昼食をご持参されることをお勧めします。

懇親会

- 時間：17:30～19:30
- 参加費：一般会員 3,500 円、学生会員 3,000 円（飲み物代含む）
- 場所：カフェ&ダイニング AKUA(アクア)
<https://tabelog.com/aichi/A2301/A230112/23014924/>
日比野駅 4 番出口から出たところを U ターンして、右側の建物 1 階
- 参加されます方は、以下 URL（もしくは右下 QR コード）の予約フォームより、5 月 21 日（火）までにお申し込みください。
http://bit.ly/LETC2019S_party
- 当日参加につきましては受付でご確認ください。
- 懇親会にご参加されます方は、受付へお集まりください。



大会会場アクセス

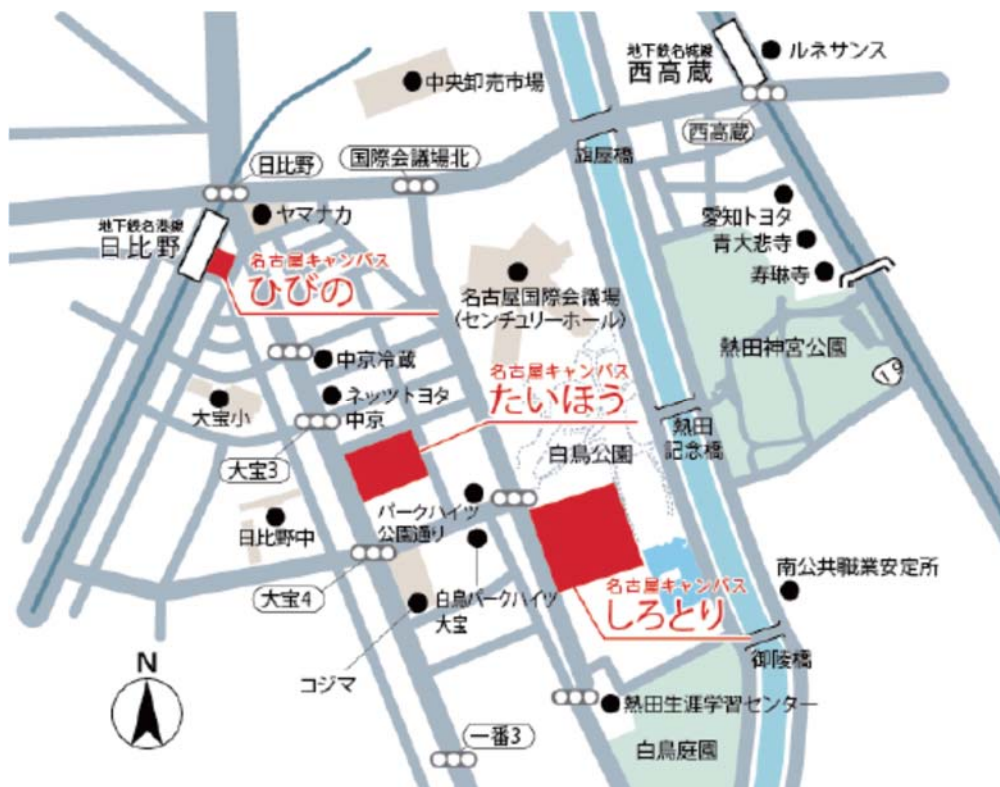
公共交通機関をお使いください。

◆ 「日比野」駅下車

1 番出口を出てすぐ左へ（日比野交差点方面）。
信号交差点を渡らず左へ約 400m。

◆ 「西高蔵」駅下車

2 番出口から名古屋国際会議場方面へ進み、
橋を渡り 2 つ目の信号交差点（日比野交差点）を渡らず左へ約 400m。



大会参加のご案内

- 会員の方の参加は無料です（ご参加までに、年会費をご納入ください）。
- 非会員の方は当日会員参加費 1,000 円を受付にてお払いください。

新規ご入会案内

LET 会員として入会手続きをしていただきますと、当日会員参加費分の金額が、年会費から割引されます。会員になられますと、LET 全国研究大会、支部研究大会（年 2 回）での研究発表、実践報告、紀要への投稿などをしていただくことができます。

- 当日会員参加費として 1,000 円をお支払い下さい。
- LET 本部サイトにて入会登録をしてください（仮会員）。
- 仮会員になられましたら、後日、年会費をご請求申し上げます（お支払いいただいた当日会員参加費 1,000 円を割引きます）。
- 年会費をお支払いいただきますと、正会員になります（3 ヶ月以内にお手続きをお願いします）。

会員登録、会員情報の更新はこちらから

LET 本部サイト：<https://www.j-let.org/>